

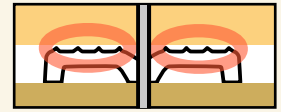
新!

PEきずり

性能アップ!

水はけアップ! 温暖化による記録的豪雨の増加に備え

瓦棧との接面の水はけを確保

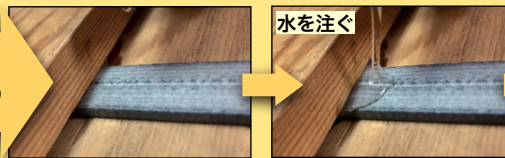


記録的豪雨で多量の水が瓦の下に流れ込んだ場合

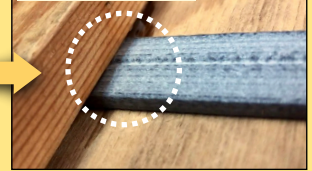
新しいPEきずり

上面の縦筋により、降雨中も水はけがよく、降雨の後水が留まらず早く乾燥します。

新しいPEきずり



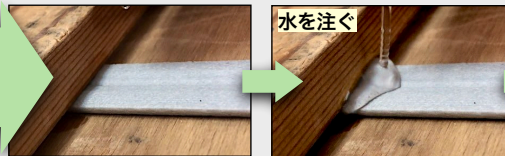
水がすばやく流れる



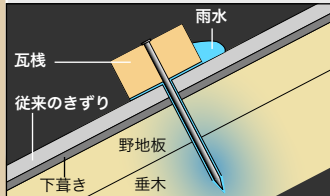
従来品

降雨の後にきずりと瓦棧の接面に水が留まり毛細管現象でしみこみます。

従来品



水が留まる



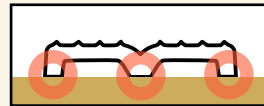
*イラストはイメージです。



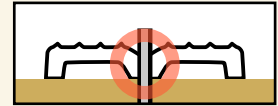
上記の動画をこちらのホームページで紹介しています。 <https://roof.town/product7.html>

防水性能アップ! より柔軟性のある素材を使用し、釘や下葺との接面に密着

新しいPEきずりは、再生ポリエチレンの中でも、高品質で柔軟性の高い原材料を使用することにより、シール性がアップしました。下葺との接面・釘穴部分などに、これまで以上に密着することでさらに防水性が高まりました。



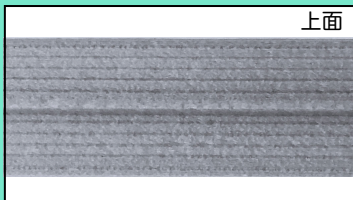
下葺との接面



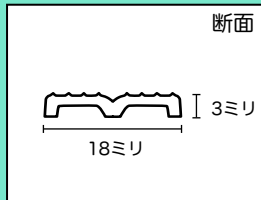
釘穴部分

施工しやすさアップ! 従来品よりも柔らかくなって取り扱いがラクに!

新しいPEきずりは、より柔軟性に富み、従来品よりもしなやかで、施工時の取り扱いがラクになりました。



上面



断面



1巻の長さ	50 m
1箱の入数	10 巻
色	グレー
材質	ポリエチレン

*写真の色調は実物と異なります。

取扱店

日本ルーフ・フロアー株式会社

〒358-0003

埼玉県入間市豊岡 1-3-17 ヨシケンビル202

TEL 04-2941-4042 FAX 04-2963-1880

ホームページ→
<https://roof.town>





当社オリジナル水切形状による高い防水性

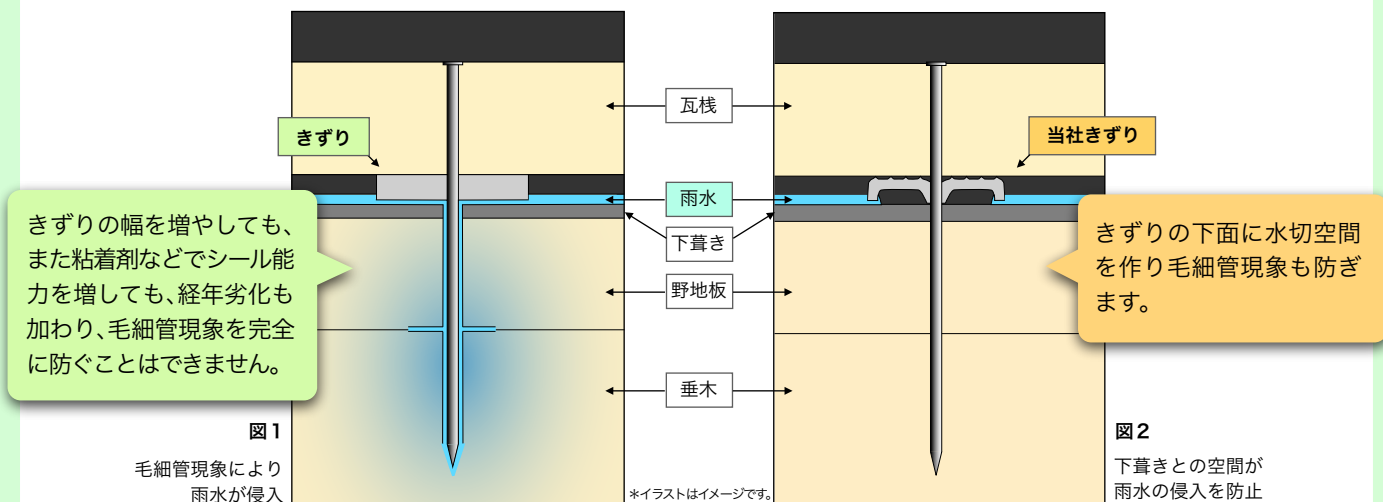


図1
毛細管現象により雨水が侵入

瓦の裏に侵入した雨水は、きずりによって軒先に流し素早く排水することができます。しかしながら、きずりと下葺きの間には毛細管現象によって水が侵入しています。このため、きずりが木材の場合には、きずりそのものが腐食し瓦棧の腐食も完全に防ぐことができません。また、きずりが合成樹脂であっても、毛細管現象により、瓦棧を垂木に設置するための釘を伝って、やはり垂木や野地板を濡らしてしまうのです。どれほど、きずりの幅を増やしても、また粘着剤などでシール能力を増しても、毛細管現象を完全に防ぐことはできません。(図1)

図2
下葺きとの空間が雨水の侵入を防止

当社のキズリテープ（PEきずり・ルーフテープ）は、耐候性の高いポリエチレンを使用していますので、腐食は発生しません。さらに、当社オリジナルの水切形状として底面に溝を形成することにより、キズリテープと下葺き材との間に空間を作り、毛細管現象により水が釘に到達するのを防ぎます。(図2)

また、新PEきずりは上面の筋状の突起により、多量の水が流れ込み、水位が上がっても水が釘に到達しにくく、瓦棧や野地の腐食を防ぎます。当社の新PEきずりは、防水性能を格段に高め、住宅全体を長く安全に保つ働きをします。

当社 低発泡性ポリエチレン キズリテープ（PEきずり・ルーフテープ）の特徴

防水性	底面に溝を形成してあるので、防水性能が格段にアップしています。素材のポリエチレンは、タッパーやラップに使われているように、吸水性がほとんどありません。また、当社製品は独立発泡させているのでスポンジ等とは異なり、柔らかくても吸水性がありません。さらに、柔軟性を持つことでシール効果によって防水性能がアップしています。
耐候性	紫外線の当たらない屋根材の下に使用するので、変色や硬化などの経年変化は、ほとんどありません。耐薬品性に優れているため、酸性雨でも腐食、変質、溶解などありません。
耐寒性	低温時の機械的強度が特に優れています。寒冷地でも硬くならず、割れるなどの心配はありません。
施工性	発泡ポリエチレンなので柔軟性があり施工がラクです。また、機械的強度が優れており、よじれや釘打ちによるつぶれが少なく、引っ張りによる断裂等が、ほとんどありません。
環境性	地球環境にやさしい、リサイクルされたポリエチレン樹脂を使用しています。ポリエチレンは焼却処分しても、二酸化炭素と水になるので、有害物質は発生しません。

コラム 日本の屋根材は「毛細管現象との闘い」

日本で瓦が発達し普及した理由として、外国に比べて大雨の発生が多く、また梅雨という独特の長雨が影響しています。欧米などで多く用いられている板状の屋根材は、毛細管現象により屋根材と屋根面に水が侵入し、乾燥するのに時間がかかります。しかし、大雨が連続せず長雨も少ないので大きな問題にはなりません。

けれども、日本の気候では、なるべく早く屋根を乾燥させるために、屋根材と屋根面の間に空間を作る必要があります。また、屋根材どうしも、多少の空間が必要となります。瓦どうしの重ね部分にも、空間ができるように設計されています。日本の屋根の歴史は毛細管現象との闘いとも言えるのです。